

講演会名称：龍谷大学世界仏教文化研究センター設立記念シンポジウム

全体テーマ：「仏教を通じた日韓文化交流の歴史と展望—未来への伝灯—」

日時：2015（平成 27）年 10 月 20 日（火） 9:30～17:30

◆ 発表者のプロフィール、講演題名、講演要旨（講演順）

【基調講演】

◆ 法名：宗浩 Jong-Ho

姓名：朴文基 Bark, Mun Gi

◆ 講演題名

「韓日(日韓)仏教交流 1500 年の記憶と未来」（通訳あり）

◆ プロフィール



1974 年 10 月、海印僧迦大学（海印講院）卒業。1994 年 2 月、東国大学校大学院禅学科（博士）。1999 年 3 月～現在、東国大学校仏教大学教授。2003 年 12 月～2004 年 1 月、アメリカ・ストーニーブルック大学訪問教授。2012 年 12 月～現在、大韓仏教曹溪宗教育院教育委員会委員長、仏教学会・韓国禅学会・仏教学研究會など学会理事（現）、東国大学校仏教大学長・仏教大学院長・宗学研究所長（現）。主な著述および訳書に『臨濟禅研究』（ソウル、経書院、1996 年）、『曹溪宗史』（共

著、ソウル、曹溪宗出版社、2004 年）、『金烏禪師と韓国仏教』（共著、ソウル、ヨンジュン、2011 年）などがある。主な論文として「桐裡山門の禅思想」（『韓国仏教学』16 集、韓国仏教学会、1991 年 12 月）、「悟りの現象的理解」（『白蓮仏教論集』7 集、性徹禅思想研究院、1997 年 10 月）、「アルコールリハビリプログラムにおける生活禅」（『韓国仏教学』33 集、韓国仏教学会、2003 年 2 月 25 日）、「禅文化の理解のための禅思想考察」（『禅と文化』3 号、韓国禅文化学会、2006 年 8 月 30 日）、「看話禅と天台の構造的関連性」（『仏教学報』62 集、東国大学校仏教文化研究院、2012 年 8 月 30 日）、「根機論としての頓漸論」（『韓国仏教学』67 集、韓国仏教学会、2013 年 10 月 31 日）などがある。

◆ 講演要旨

韓日両国の仏教が交流を始めてから、はや 1500 年になる。その間、韓日間は互いにやりとりして多くの交流を持ってきた。

飛鳥時代の聖徳太子や、行善の百済や高句麗仏教の修学、奈良時代の戒律・法相・華嚴宗における百済および新羅との深い交流などが、当時の相互交流状況を示しており、これらの時代ほどではないが、平安時代は三国仏教の日本伝来と文献および思想的影響により、両国仏教の人情が互いに交差・交感する時代であったと見られる。室町時代から江戸時代にかけての時期には、韓日両国の仏教文献交流および流通は鎌倉時代以前に比べて顕著に減ったが、明治時代以後、進展した日本の近代的仏教研究は韓国の僧侶と研究者を通して韓国の近代仏教学に多くの影響を与えたりもした。換言すれば、古代から中世までは韓国の仏教が日本に多くの影響を及ぼし、近代以後には日本仏教学界の成果が韓国に影響を及ぼしたのである。

韓日両国の国交樹立 50 周年を迎えた今日、韓日相互間の理解と国際的水準での共同研究、仏教文化の活発な交流などが切実に要求されている。それだけではなく、社会問題に対する仏教的解決方法の提示や、痛みと苦痛を受ける人々の治癒のための共同関心と対処の努力が必要だと考えられる。

（翻訳：赤羽奈津子）

【第一部：時を越える—仏教の研鑽—】

◆ 馬場久幸（ばばひさゆき）

◆ 講演題名

「日韓仏教交流と高麗版大蔵経—室町・江戸初期の大蔵経の活用を中心として—」

◆ プロフィール



1971年京都に生まれる。1994年佛教大学文学部仏教学科仏教文化専攻卒業、2003年大韓民国圓光大学校大学院に留学、2008年同大学院修了。現在、佛教大学非常勤講師。哲学博士（圓光大学校）。主な論文に「日本 大谷大學 소장 高麗大蔵経의 傳來와 特徴」（国立文化財研究所編『海外典籍文化財調査目録 大谷大學所藏高麗大蔵経』、2008年）、「日本における高麗版大蔵経の受容—足利氏を中心として—」（『福原隆善先生古希記念論集佛法僧論集』2巻、山喜房佛書林、

2013年）、「일본 소재 고려대장경—인경본으로 본 인쇄 연대의 검토—」（유부현편『고려재조대장경과 동아시아 의대장경』、韓國学中央研究院出版部、2015年）などがある。

◆ 講演要旨

室町時代（朝鮮時代前期）の仏教興隆は、高麗版大蔵経の交流であったと言えるほど、朝鮮半島から多くが日本に齎された。記録によると、日本側からの要請は65回にも及び、これに応じて朝鮮からは44歳もの高麗版大蔵経が日本に伝来した。高麗版大蔵経とは、高麗の顕宗および高宗代に、契丹軍とモンゴル軍の侵攻を仏力で退散させようとして作られた大蔵経である。特に、高宗代に作られた大蔵経は、宋や契丹などの大蔵経と内容を校合している。日本では、江戸時代に浄土宗の忍澈（1645-1711）によって高麗版大蔵経の優秀性が説かれた。そうした評価により、近代において大日本校訂縮刻大蔵経（縮刷大蔵経）や大正新修大蔵経の底本として高麗版大蔵経が使われた。江戸時代以降、日本で高麗版を活用した事例が確認されているが、室町時代での活用事例が見られない。

本発表では室町時代における高麗版の日本伝来について焦点を当て、江戸時代初期までの活用事例を検討した結果、北野社一切経の底本として活用されていたこと、将軍誕生日祈祷で転読されていたこと、宗存が高麗版を底本とし、さらに内容を校合して新たに大蔵経を刊行しようとしていたことなどが確認できた。

◆ 藤能成（ふじよしなり）

◆ 講演題名

「大衆仏教の巨星・元暁と親鸞—その生涯と精神・思想の共通性—」

◆ プロフィール



1957年、福岡県生まれ。龍谷大学文学部教授・哲学博士。韓国・大邱大学校日語日文学科専任講師、九州龍谷短期大学教授を歴任。関西学院大学社会学部、龍谷大学大学院真宗学専攻修士課程を経て、韓国・東国大学校仏教大学院印度哲学科博士課程修了。専門は真宗学、韓国仏教、比較宗教、仏教文学。元暁、親鸞、蓮如、パウロ等の人間救済の思想が共通する普遍的体験に基づくことを論証してきた。著書に『元暁の浄土思想研究』（韓国・民族社）、『信の仏道—元暁と親鸞』（本願寺国際センター）、『現代社会の無明を超える—親鸞浄土教の可能性』（法蔵館）、論文に「パウロと親鸞の対論」、「大衆教化の思想の底に流れるもの」などがある。

◆ 講演要旨

元暁（新羅・617 - 686）と親鸞（日本・1173 - 1262）は、それぞれの国を代表する仏教思想家にして、大衆教化者である。両者は、生きた時代と地域は異なるが、共に民衆に念仏を広め、本質的な生き方へと導いた。両者の生涯には共通点が多い。結婚し、子を設けたこと。苦難を機に罪業性を自覚し改名し、その後、民衆に念仏を広めたこと。『無量寿経』に基づき浄土思想を展開したこと。多くの著作を残したこと等が挙げられる。また両者は精神・思想においても共通性が見られる。共に民衆の救済を願い、より多くの人々が救われるための浄土思想を展開し、人間の思議・思量が及ばない仏智の働きに対する全幅の信頼を抱き、疑いを超えて、信じ、念じ、まかせて行く仏道を示した。また両者が「仏智の不思議」について、同様の表現をしているのは「仏智に出遇う体験」が、時代と地域を超えた普遍的な共通体験であることを示唆するものである。また仏智疑惑を超える方法にも両者の共通性が見られることは、大乘仏教が示した仏道が、決して人間の恣意や観念ではなく、普遍的な真実体験に基づく、ありのままの現実に根ざした歩みであることの証左であろう。

【第二部：境を越える—仏教の伝播—】

◆ 赤羽奈津子（あかばねなつこ）

◆ 講演題名

「渡来系氏族と寺院」

◆ プロフィール



2003年、龍谷大学文学部卒業。2011年、龍谷大学文学研究科東洋史学専攻博士後期課程単位取得満期退学。2014年、博士（文学）取得。現在、龍谷大学仏教文化研究所客員研究員、龍谷大学高大連携担当講師。専門は、朝鮮三国時代における日中韓三地域の対外交渉史。主な業績に、「金官加耶の対外関係—倭との関係を中心に」（『東洋史苑』76、2010年）、「古代朝鮮半島における仏教と対外関係—高句麗・百済の仏教銘文を中心に」（『河合文化教育研究所研究論集』10、2012年）、「隋代における造塔・造像銘文の調査・研究」（共著、『仏教文化研究所紀要』52、2014年）などがある。

◆ 講演要旨

古来、朝鮮半島と日本列島の間には、密接な人の往来があった。とりわけ、6～7世紀、朝鮮半島において高句麗・百済・新羅・加耶諸国などによる抗争が激しさを増し、やがて新羅が三国を統一するに至ると、戦乱を避けた人々が多く日本列島へと渡ってきた。例えば、『新撰姓氏録』第三帙には「諸蕃」として、多くの渡来系氏族の名が列挙されている。彼らは、当時の先進的な文化・技術を有しており、日本（倭）は積極的にそれらを吸収しようとした。彼らがもたらしたものの中に、「仏教」がある。それは単に教義内容のみならず、寺院建築をはじめとした様々な技術をも含有していた。とりわけ、渡来系氏族にゆかりのある寺院に関しては、建立に至る背景・技術・関連氏族など、様々な方面において豊富な先行研究が蓄積されている。しかし、建立後の寺院の様相に関してはなお検討の余地がある。本発表の目的は、「仏教を通じた日韓文化交流の歴史と展望」というシンポジウムのテーマと関連し、古代寺院における人々の交流の諸相について、飛鳥寺や高麗寺など、渡来系氏族や彼らと関係の深い氏族によって建立された寺院を例として考察していきたい。

◆ 姓名：姜文善 Kang, Mun Sun

法名：慧諤 Hye-Won

◆ 講演題名

「朝鮮開化期、日本仏教の布教活動—真宗大谷派と曹洞宗の布教—」（通訳あり）

◆ プロフィール



1952年3奉5日生まれ。現在、ソウル・東国大学校仏教学部教授。ソウル・東国大学校仏教学科卒業（1974年）。東京・駒澤大学仏教学科博士課程修了（1985年）。東国大学校大学院仏教学博士学位取得（1988年）。米国・アトランタ・ジョージア大学客員教授（2006年）。東国大学校仏教文化研究院院長（2007年）。東国大学校仏教大学学長および大学院長（2009年）。東京・東洋大学文学部研究

教授（2010年）。著書に『北宗禅研究』『維摩経の話』など、編著に『信心銘 証道歌』『禅家語録』など、論文に「近現代期韓日比丘尼の存在様相に関する試論的考察」「公案と看話禅との関係性に関する小考」「戒律と清規の関係から見た現代韓国の禅院清規」他多数。

◆ 講演要旨

朝鮮開化期(1876-1910年)の日本仏教の布教活動については、便宜上、開港期と大韓帝国期に分けて捉えることができる。日本仏教の朝鮮における布教活動を、帝国主義侵略の一基軸であったと見ることもできるが、一方で、国内外の政治状況の変化に伴い、布教活動が推移し、変化していった様相を把握する努力も求められる。

本稿では 朝鮮開港期と大韓帝国期を通じて目立った活動を行った真宗大谷派の奥村円心と五百子の兄妹、そして大韓帝国末期に仏教界に少なからぬ衝撃を与えた曹洞宗・武田範之の活動を紹介したい。これら布教使の活動は、開化期の日本仏教の布教の様相と特徴を把握する上で、重要な端緒を与えてくれるだろう。

(翻訳：藤能成)

【第三部：未来へ向けて—仏教の役割—】

◆ 出羽孝行（でわたかゆき）

◆ 講演題名

「韓国における児童生徒人権条例の内実化—京畿道における教員研修を中心に—」

◆ プロフィール



大阪府生まれ。2006年、龍谷大学大学院文学研究科博士課程修了（博士[教育学]）。現在、龍谷大学文学部哲学科教育学専攻准教授。1994年、龍谷大学の交換留学生として東国大学校へ留学。2014年4月～2015年3月、東国大学校師範学部客員教授。専攻分野は、異文化間教育学、比較教育学。研究主題は、中国朝鮮族の民族教育、日韓教育比較。主な業績は、「韓国・京畿道児童生徒人権条例の成立過程に関する一考察」（日本比較教育学会編『比較教育学研究』第48号、東信堂、2014年）、「京畿道児童生徒人権条例制定後の学校の変化に関する研究：韓国・京畿道の教師の調査を通して」（日本学校教育学会編『学校教育研究』第30号、教育開発研究所、2015年）など。

◆ 講演要旨

本報告は2009年に韓国で初めて制定された「京畿道児童生徒人権条例」（以下、適宜、条例とする）の制定を契機に児童生徒の人権を尊重しながら民主的な学校を創造していくための現場教師達の取り組みについて考察していくものである。具体的には2014年夏に京畿道教育庁が主催するNTTP研修として実施された「京畿道平和人権研修」に着目し、研修の運営主体である「京畿道人権教育研究会」所属教員の取り組み、そして同研修に参加した教員の認識を分析した。

分析の結果、「京畿道平和人権研修」は参加した教員にとって児童生徒の人権に関心を持つきっかけ

となり、研修自体への満足度も高いことなどが明らかになった。このことから、教育行政の方針により左右されることのない、より長期的な児童生徒人権の「内実化」を進めるためには NTPP 研修のような教育庁の支援の下、持続的な教員自身による学校文化変革のための活動が重要になってくることが確認された。

文化的に類似点が多いといわれ、いじめや体罰といった共通の教育課題を持つ日本と韓国であるが、教師達の力によってよりドラスチックに学校文化を変えていこうとする韓国の事例から日本の教育界が学ぶところは大きい。

◆ 金浩星 (Kim, Ho Sung)

◆ 講演題名

「韓日平和のための仏教の役割—『懺悔なき許し』の再解釈を中心として—」

◆ プロフィール



1960年生。現在、東国大仏教学部、及び大学院印度哲学科教授。印度哲学と仏教に関する論文 80 余編、訳書及び著書 30 巻を刊行した。学術書としては『バガヴァッド・ギーターの哲学的理解』(2015)、『鏡虚の横顔』(2014)、『仏教解釈学研究』(2009)、『千手経の新しい見方』(2006)、『大乘経典と禅』(2002) 等がある。日本の佛教大学 (2002.9-2003.8) と高知大学 (2013.4-9) において訪問研究を行った。2011 年、龍谷大において「千手経を通して見た韓国仏教」をテーマとして交換講義を行った。2002 年以来、日本仏教を少しずつ勉強しており、現在、個人的に「日本仏教史読書会」勸進でもある。

2002 年以来、日本仏教を少しずつ勉強しており、現在、個人的に「日本仏教史読書会」勸進でもある。

◆ 講演要旨

本稿は、私自身が書いた「懺悔なき許し」(2003) というエッセイを再解釈して、韓日間の“謝罪”と“許し”の問題について考察するものである。具体的には韓日両国の仏教徒に、韓日平和のための役割を果たして頂くことを提案する。

日本の仏教徒には、まず“日本”内において、すなわち“加害者日本”は“被害者日本”に“謝罪”することができるよう、思想的に説得して欲しい。

また韓国の仏教徒には、“加害者日本”からの“謝罪”のあるなしにかかわらず、許すことができなければならない、と説得しようとする。言い換えれば、日本の仏教徒に対しては「自己否定、我からの脱皮(脱我ないし無我)」を求め、韓国の仏教徒に対しては「対立を超越する思考と非暴力についての展望を持つ必要がある」と考えるのである。

このような観点は、一つの事件の中で融合する。それは仏陀の“出家”である。出家は“家”を離れることであるが、その“家”とは、象徴するものによって多様な含意を持つ。本稿で扱うところの出家は“家”の中で最も巨大な“国家”という家から出家をしようということである。それは「民族主義を超える」ということであり、韓日すべての仏教徒達にとって、真の韓日平和を実現する上で、欠くことのできない徳性であろう。

(翻訳：藤能成)